

『万葉集』の中の「家」の意味

鄧

慶

真

要約

《萬葉集》中的“家”的內涵

鄧慶真

關於古代日本（包括《萬葉集》被編撰的年代）的婚姻形態的多樣性，在社會人類學以及文化人類學的領域中，已有許多的謎團被解開。小論試圖在這些研究成果的基礎上，對有關“家”這個詞在古代日語中所被賦予的含義，從《萬葉集》這本日本最古老的歌集中尋求答案。

本稿從各種角度，在《萬葉集》中選取和“家”有關或連用的詞，通過這些詞，逐一驗證“家”在詩歌中所表達的意思。從對這些詞和詩歌的研究中可以發現，受當時復雜的婚姻形態的影響，對不同性別的人，及其所在的不同的婚姻狀態來說，“家”這個詞所包涵的內容也有所不同。

「家」について述べる時、避けることのできないのは家族制度の問題である。社会人類学・文化人類学の分野では、この問題について実に夥しい論述がなされている。特に『万葉集』の成立時期を含めた古代日本の家族制度をめぐる論争の場合、「父系家族説」、「母系家族説」と「双系家族説」とがある。本論文の目的は古代日本の家族制度を説明することになく、そのことよりも、当時の人々がどのような発想をもとにして「家」という言葉を使ったのかを見ていきたいのである。つまり、語彙を中心に「家」という言葉がどのような場合に使われていたのかの解釈を試みようとするものであることを断っておきたい。

なお、品川滋子氏のご指摘のように、

万葉集のイモ・セは未婚の恋人同士の呼称であるか、はたまた夫婦の間での呼称であるかを歌意によって区別することが難しい。イモ・セは、熱烈な恋を打ち明けるときにも、愛する妻や夫に対する場合にも区別なく用いられている。⁽¹⁾

つまり、「妹」と「背」は時には妻（あるいは夫）、時には恋人、時には初めて逢った異性を指すことができることになる。事実、今現在の我々の「結婚」に対する考え方を持って『万葉集』の歌を詠むと、それが正式に結婚しているのか、どれが結婚をしていないのかを区別することができないのである。したがって、本論文では、歌の文脈・背景により、男と女が結ばれたと判断できる場合は「既婚」といい、結ばれていない場合は「未婚」という言葉を使うことにする。

それに加えて、本論文中に『万葉集』の歌を引用する時には、特に断らない限り、塙書房刊『万葉集 訳文篇』⁽²⁾を用いることにした。

一

『万葉集』には、「家」の類義語と対義語がいくつか存在する。類義語としては、「ヤ」と「ヤド」があり、対義語としては、「タビ」が見られる。「イヘ」とこの三者の意味上の比較研究はすでに先学により多くなされている。

「イヘ」と「ヤ」との違いは、早く澤瀉久孝博士が、

「家」といふ言葉は（中略）主として「すみか」「家庭」などの意に用ゐられ、「ヤ」は（中略）「屋」「室」の字が用ゐられ、「家屋」「屋室」などの意に用ゐられてゐて、「イヘ」と「ヤ」とはほぼ區別されてをり、「家に來て」の「イヘ」と「わがや」の「ヤ」とは言葉も意味も違つてゐたのである。⁽³⁾

と述べられていて、真鍋次郎氏がさらに、

「いへ」といふとき、上代人がその概念内容として建物の外に、その住人としての「人」を不可欠の構成要素として意識してゐたこと明である。（中略）「いへ」は人的要因を不可欠の構成要素とする点において、「ヤ」と対立する、と同時に一方において、（中略）たび、やどり、いはりがすべて臨時的・一時的のものであるに對して、いへはすまひ、生活の場として恒久・恒常的のものと考へられてゐたのである。⁽⁴⁾

と再確認された。そして、「いへ」、「やど」と「旅」⁽⁵⁾が作歌場面において、「いへ」は旅にあって、あるいは旅を契機として、本郷の家族——特に

妹―を対象として表出される。それらに対して「やど」は旅先での仮の泊地を示すものとして歌われる。⁽⁵⁾

と、吉井巖氏により明らかになった。小論はこれらのすぐれた研究成果を踏まえながら、論を進めることにする。

前述のように、「家」は家族の存在がないと成り立たないことが分かった。ここで『万葉集』の歌を通して、家族の一員として、古代の人々がどのように「家」を認識していたかを考えてみることにする。

二

まず「家」の様子を窺ってみる。

婚姻制度、家族構成がどのようなものであったとしても、家族の一員としての男と女の存在は、いつの時代になっても変わらないものである。しかし、同じように自分の「家」とは言っても、果たして男女それぞれにとって同じことを意味していたのであろうか。この問題について、男女別々に検討していくことにする。

まず男の詠んだ歌によって、男の言う「家」がどのようなものであったのかを検討してゆくことにする。ここでは、その家族構成を見てゆくことになる。

1 母、父母と同居しているもの（傍線筆者、以下同じ）

うちひさす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ 国
の奥かを 百重山 越えて過ぎ行き いっしかも 都を見むと 思
ひつつ 語らひ居れど 己が身し 労はしければ 玉梓の 道の隈

回に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひ
つつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父取り見まし 家にあらば 母
取り見まし 世間は かくのみならし 犬じもの 道に伏してや
命過ぎなむ (五・八八六)
家において 母が取り見ば 慰むる 心はあらまし 死なば死ぬと
も (五・八八九)

水江の浦島子を詠む一首 并せて短歌

…… 世間の 愚人の 我妹子に 告りて語らく しましくは 家
に歸りて 父母に 事も語らひ 明日のごと 我は来なむと 言ひ
ければ 妹が言へらく 常世辺に また歸り来て 今のごと 逢は
むとならば このくしげ 開くなゆめと …… (九・一七四〇)

杵岐島に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去せし時

に作る歌一首 并せて短歌

天皇の 遠の朝廷と 韓国に 渡る我が背は 家人の 斎ひ待たね
か 正身かも 過ちしけむ 秋さらば 歸りまさむと たらちねの
母に申して 時も過ぎ 月も経ぬれば 今日か来む 明日かも来む
と 家人は 待ち恋ふらむに 遠の国 いまだも着かず 大和をも
遠く離りて 岩が根の 荒き島根に 宿りする君(十五・三六八八)
そのほかに、父母を旅先で詠んだ歌が多数ある。例えば、

一世には 二度見えぬ 父母を 置きてや長く 我が別れなむ

(巻五・八九一)

大君の 命恐み 磯に触り 海原渡る 父母を置きて

(二一〇・四三三八)

忘らむて 野行き山行き 我来れど 我が父母は 忘れせぬかも

(二〇・四三四四)

大君の 命にされば 父母を 斎瓮と置きて 参る出来にしを

(二〇・四三九三)

などである。これらの歌から見れば、子としてのたび人の、父親に対する印象は決して不明確ではなく、父と母と同居していたことが分かる。

2 兄弟と同居しているもの

弟の死にけるを哀しびて作る歌一首

父母が 成しのまにまに 箸向かふ 弟の命は 朝露の 消易き命
神のむた 争ひかねて 葦原の 瑞穂の国に 家なみや また帰り
来ぬ …… (九・一八〇四)

3 妻と子供と同居しているもの

死にし妻を悲傷して、高橋朝臣の作る歌一首 并せて短歌

…… にきびにし 家ゆも出でて みどり子の 泣くをも置きて
朝霧の おほになりつつ 山背の 相楽山の 山のまに 行き過ぎ
ぬれば 言はむすべ せむすべ知らに 我妹子と さ寝しつま屋に
朝には 出で立ち偲ひ …… (三・四八一)

我る旅は 旅と思ほど 家にして 子持ち瘦すらむ 我が妻かなし
も (二十・四三三三)

この二首から作者がかつて妻と子供と同居していたことが分かる。さらに次のような歌がある。

男子の名を古日といふに恋ふる歌三首 長一首短二首

世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我が中の 生

まれ出でたる 白玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は しき
たへの 床の迎去らず 立てれども 居れども とともに戯れ 夕星
の 夕になれば いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさか
り さきくさの 中を寝むと うつくしく しが語らへば いっ
しかも 人となり出でて 悪しけくも 良けくも見むと 大舟の
思ひ頼むに …… (五・九〇四)

この歌は、かつて息子が生きていた時の家族生活を生き生きと再現している。この歌からも第一人称と自称する人が妻と子供と一緒に住んでいたことが分かる。

4 母と妻と同居しているもの

天地と ともにがもと 思ひつつ ありけむものを はしけやし
家を離れて 波の上ゆ なづさひ来にて あらたまの 月日も来経
ぬ 雁がねも 継ぎて来鳴けば たらちねの 母も妻らも 朝露に
裳の裾ひづち 夕霧に 衣手濡れて 幸くしも あるらむごとく
出で見つつ 待つらむものを …… (十五・三六九一)

忽ちに枉疾に沈み、殆と泉路に臨む。よりて歌詞を作り、

以て悲緒を申ぶる一首 并せて短歌

……たらちねの 母の命の 大舟の ゆくらゆくらに 下恋にい
つかも来むと 待たすらむ 心さぶしく はしきよし 妻の命も
明け来れば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつつ 夕されば 床
打ち払ひ ぬばたまの 黒髪敷きて いつしかと 嘆かすらむそ
妹も兄も 若き子どもは をちこちに 騒き泣くらむ…… (一七・三九六二)

追ひて防人の別れを悲しぶる心を痛みて作る歌一首 并せて短歌

……東男は 出で向ひ かへり見せずて 勇みたる 猛き軍卒と
ねきたまひ 任けのまにまに たらちねの 母が目離れて 若草の
妻をもまかず (中略) 事し終はらば 障まはず 帰り来ませと 斎
瓮を 床辺にすゑて 白たへの 袖折り返し ぬばたまの 黒髪敷
きて 長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき妻らは

(二〇・四三三)

防人の情の為に思ひを陳べて作る歌一首 并せて短歌

大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらをの 心振り起
こし 取り装ひ 門出をすれば たらちねの 母搔き撫で 若草の
妻取り付き 平けく 我は斎はむ ま幸くて はや帰り来と ま袖
もち 涙を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば 群鳥の 出で立ちか
てに 滞り かへり見しつゝ いや遠に 国を来離れ いや高に
山を越え過ぎ……

(二〇・四三九)

右の二首は、大伴家持が防人の心を代弁して詠んだ歌である。しかし、たとえその歌が防人本人の作でなくても、代わって歌を作った人が當時の社会的常識に基づいて作ったと考えられるので、この例としてあげておいてよいであろう。

5 父母、妻、子どもと同居しているもの

貧窮問答の歌一首 并せて短歌

風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべもなく 寒く
しあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒 うちすすろひて し
はぶかひ 鼻びしびしに 然とあらぬ ひげ搔き撫でて 我を除き

て 人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布
肩衣 ありのことごと 着襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧

しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 乞ひて泣くらむ
この時は いかにしつつか 汝が世は渡る 天地は 広しといへど
我がためは 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 我がためは
照りや給はぬ 人皆か 我のみや然る わくらばに 人とはあるを
人並に 我もなれるを 綿もなき 布肩衣の 海松のごと わわけ
さがれる かかふのみ 肩にうち掛け 伏廬の 曲廬の内に 直土
に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲
み居て 憂へ吟ひ かまどには 火気吹き立てず 甑には 蜘蛛の
巣かきて 飯炊く ことも忘れて ぬえ鳥の のどよみ居るに い
とのきて 短き物を 端切ると 言へるがごとく しもと取る 里
長が声は 寝屋処まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきも
のか 世間の道

(五・八九二)

この歌から父母、妻、子どもが同居していることが窺える。

ところで、この歌については、漢詩の模倣であると指摘される。『陶潜集』、類書の「貧」などの條をあれこれこれめくったもの⁽⁷⁾という小島憲之説⁽⁸⁾、「貧家賦」の模倣という土屋文明説⁽⁹⁾、そして唐代に流行した王梵志の詩の影響も指摘されている⁽⁸⁾。しかし、漢詩から影響を受けたからと言って、この歌が「憶良にとって詩の真実ではあっても、庶民の生活とはいえない」と⁽⁹⁾と、その現実性を否定することが果たしてできるのであるうか。次に角度を変えて、「父母」という言葉に焦点を当てて見てみよう。

『万葉集』の中に父母に対する呼び方はいくつかある。「チチ」、「ハハ」、「オモ」、「チチノミコト」、「ハハノミコト」、「チチキミ」、「ハハトジ」、「オヤ」、「チチハハ」、「オモチチ」などが挙げられる。しかし、これらが自分の父母を指すか、今でいう義理の父母を指すかは、いづれも不明である。「貧窮問答歌」が「机上の創作物」だと解釈する反家父長制説は、そもそもこの歌の中の「父母」が男方の父母であることを前提としたものである。他の『万葉集』の歌を見てみよう。

天雲の 向伏す国の ものふと 言はるる人は 天皇の 神の御
門に 外の重に 立ち候ひ 内の重に 仕へ奉りて 玉葛 いや遠
長く 祖の名も 継ぎ行くものと 母父に 妻に子どもに 語らひ
て 立ちにし日より たらちねの 母の命は 斎盆を 前にすゑ置
きて 片手には 木綿取り持ち 片手には 和たへ奉り 平けく
ま幸くませと 天地の 神を乞ひみ …… (二・四四三)

防人の別れを悲しぶる情を陳ぶる歌一首 并せて短歌

大君の 任けのまにまに 島守に 我が立ち来れば ははそ葉の
母の命は み裳の裾 摘み上げ搔き撫で ちちのみの 父の命は
袴づのの 白髻の上ゆ 涙垂り 嘆きのたばく 鹿子じもの ただ
一人して 朝戸出の 悲しき我が子 あらたまの 年の緒長く 相
見ずは 恋しくあるべし 今日だにも 言問ひせむと 惜しみつつ
悲しびませば 若草の 妻も子どもを ちちに 多に囲み居
春鳥の 声の吟ひ 白たへの 袖泣き濡らし 携はり 別れかて
にと 引き留め 慕ひしものを 大君の 命恐み 玉梓の 道に出
で立ち 岡の崎 い回むるごとに 万度 かへり見しつ 遙々に

別れし来れば 思ふそら 安くもあらず 恋ふるそら 苦しきも
のを うつせみの 世の人なれば たまきはる 命も知らず 海原
の 恐き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり巡り 我が来るまでに
平けく 親はいまさね 障みなく 妻は待たせと 住吉の 我が
皇神に 幣奉り 祈り申して 難波津に 舟を浮けすゑ 八十梶貫
き 水手整へて 朝開き 我は漕ぎ出ぬと 家に告げこそ

(二〇・四四〇八)

この二首には、いづれも「母の命」が見られる。先に4(母と妻と同居しているもの)の部分で挙げた三九六二番歌を、再度あげてみる。

……たらちねの 母の命の 大舟の ゆくらゆくらに 下恋にい
つかも来むと 待たすらむ 心さぶしく はしきよし 妻の命も
明け来れば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつ 夕されば 床
打ち払ひ ぬばたまの 黒髪敷きて いつしかと 嘆かすらむそ
妹も兄も 若き子どもは をちこちに騒き泣くらむ……

(一七・三九六二)

この中の「母の命」について、小学館古典全集は、

母の命―家持の叔母であり、義母でもある坂上郎女をさす。

と説明している。古代日本の居住規制の三つの形態と照らし合わせる
と、「妻方居住」に当たるので、「母の命」は妻方の母親を指すと思いが
ちである。確かに、右に挙げた「母の命」、或いは「父の命」の見られる
歌は、皆妻と子供も一緒に詠まれた歌でもある。しかも「通い」の場合
の歌には、「母」としか言わないことが多い。しかし、同じ同居と見られ
る4(母と妻と同居しているもの)のところで挙げた卷一五の三六九一

番歌と卷二〇の四三三一番歌には、「母の命」ではなく「母」と言っている。したがって、「母の命」（または「父の命」と「母」（または「父」）の間で、男女のどちら側の母（または父）を指すかの点においては、はっきりした違いが見られない。

「父母」（或いは「母父」）の歌についても同じことが言える。例えば卷一九の四二二一番歌であるが、

処女墓の歌に追同する一首并せて短歌

…… 父母に 申し別れて 家離り 海辺に出で立ち 朝夕に 満ち来る 潮の 八重波に なびく玉藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ …… (十九・四二二)

この中の「父母」は処女自身の父母であることが分かる。それに、次の歌によって、当時の男と女が自分の父母と相手の父母を区別する意識を持っていたことが分かる。

汝が母に こられ我は行く 青雲の 出で来我妹子 相見て行かむ (二四・三五九)

我が母の 袖もち撫でて 我が故に 泣きし心を 忘らえぬかも

(二〇・四三五六)

このように、相手と自分の父母を区別する意識を持っていたが、「父母」（或いは「母父」）という言葉は男女のどちら側の父母ともいえるのである。つまり、ただ単に「父母」というときはどちら側の父母を指すかについて不明だということである。「貧窮問答歌」の中の「父母」も同じである。

したがって、「父母」という言葉がはっきりと男方と女方のいづれかに

特定できない限り、「貧窮問答歌」の現実性を疑う理由がなからう。卷九の一八〇〇番歌と卷一三の三三三九番歌も同じ類の歌である。

以上によって、男の「家」には1父母（兄弟もこの類に属する）、2妻子供、3母、妻、4父母（妻方か夫方かは不明）、妻、子どものいたことが分かる。

次に女の詠んだ歌によって、「家」の様子を探ることにする。ただ、女が自分の家の様子を詠んだものが少ないので、男の詠んだ歌のところで行った分類はせず、順次歌を挙げて見てゆくことにしたい。

玉島の この川上に 家はあれど 君をやさしみ 頭はさずありき

(五・八五四)

春されば 我家の里の 川門には 鮎子さ走る 君待ちがてに

(卷五・八五九)

以上二首は、漁夫の娘たちが初めて出会った男と交わした歌である。

この「家」、「我家」は、自分の生まれ育った家のことである。

風交じり 雪は降るとも 実にならぬ 我家の梅を 花に散らすな

(八・一四四五)

これは大伴坂上郎女が、自分の娘を「我家の梅」に喩えた歌である。

この「我家」には、娘と一緒に住んでいたことが分かる。

春日山 雲居隠りて 遠けども 家は思はず 君をしそ思ふ

(十一・二四五四)

この歌を見ると、「家」と「君」とが別々であることが分かる。つまり、この女の家であり、そこには「君」がいなかったということである。

月待ちて 家には行かむ 我が刺せる 赤ら橋 影に見えつつ

(十八・四〇六〇)

右の件の歌は、左大臣橋卿の宅に在りて肆宴するときの御歌、并せて奏歌なり。

これは粟田女王が宴の席で作った歌である。この「家」は、自分の住んでいる家だと見ていいだろう。

処女墓の歌に追同する一首 并せて短歌

…… 父母に 申し別れて 家離り 海辺に出で立ち 朝夕に 満ち来る潮の 八重波に なびく玉藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ ……

(十九・四二二一)

これは妻問いに来る二人の男の争いに悩み、死ぬ決意をした処女が父母と同居している家を去る場面を描いた歌である。

以上見てきたように、女の「家」は、生まれ育ったところである場合が多い。その中には、既に男と結ばれた、つまり妻となっていた場合のものもある(二四五四・四二二一番歌)。

ところで、こんな歌がある。

草枕 旅行く背なが 丸寝せば 家なる我は 紐解かず寝む

二〇・四四一六

この中の「家」は夫婦二人の家なのか、それとも歌を詠んだ女の生まれ育った「家」なのか。次にこの「家なる…」について検討してみることにする。

三

「家にいる妻」、あるいは「家にいる私」と言うように、誰の家と特定せず、ただ「家」と言っただけの場合、どのように読み取ればいいのか。この時の「家」は、一緒に住んでいる夫婦二人の「家」なのか、それとも最初から別々に住んでいて、片方が旅に出、片方が自分の実家にいる場合の「家」なのか。これを考えるために、同じ構造のもので、「家なる…」以外の形をとる例を見ることにする。「なる」の位置に当たる言葉は、存在を表す動詞と移動性のある動詞とに限定することにする。

1 家にあり

…… 国にあらば 父取り見まし 家にあらば 母取り見まし 世間は かくのみならし ……
家にありて 母が取り見ば 慰むる 心はあらまし 死なば死ぬと
も (五・八八六) (五・八八九)

この二首の「家」は父母のいる、生まれ育ったところと見ていいだろう。

2 家に帰る

ひさかたの 天路は遠し なほなほに 家に帰りて 業をしまさに
…… しましくは 家に帰りて 父母に 事も語りひ 明日のごと
我は来なむと 言ひければ…… (五・八〇二) (九・一七四〇)

新羅辺か 家にか帰る 壱岐の島 行かむたどきも 思ひかねつも

(二五・三六九六)

この三首の中では、第一首は次の八〇〇番歌の反歌となっている。

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世間は かくぞこ
とわり もち鳥の かからはしもよ 行くへ知らねば うけ杵を
脱き棄ることく 踏み脱きて 行くちふ人は 石木より 生り出し
人か 汝が名告らさね 天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大
君います この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み たにぐ
くの さ渡る極み 聞こし食す 国のまほらぞ かにかくに 欲し
きまにまに 然にはあらじか (五・八〇〇)

この歌の内容から見れば、八〇一番歌の「家」は常住したところであることが分かる。第二首ははっきりと父母のいる家だと分かる。第三首の「家」は旅先と二者択一の状態に位置づけられ、いつも住み慣れたところだといえよう。

3 家に来

家に来て 我が屋を見れば 玉床の 外に向きけり 妹が木枕

(二一・二二六)

…… 水江の 浦島子が 鰹釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも
来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに …… (九・一七四〇)

第一首は妻と同居しているところと見てよからう。第二首は、2に挙げたのと同じ歌なので、父母と一緒に住んでいるところである。

4 家に至る

天地の 神も助けよ 草枕 旅行く君が 家に至るまで

(四・五四九)

我が背子が 着る衣薄し 佐保風は いたくな吹きそ 家に至るま
で (六・九七九)

三諸の 神奈備山ゆ との曇り 雨は降り来ぬ 雨霧らひ 風さへ
吹きぬ 大口の 真神の原ゆ 思ひつつ 帰りにし人 家に至りき
や (二三・三三六八)

この三首ともたび人が無事に帰ってくることを祈る歌である。「家」は安全な目的地であると同時に、いつも住んでいたところでもある。

5 家ゆ出づ

死にし妻を悲傷して、高橋朝臣の作る歌一首并せて短歌

……白たへの 手本を別れ にきびにし 家ゆも出でて みどり子
の 泣くをも置きて…… (三・四八一)

この「家」には、妻と子供も一緒に住んでいたことが分かる。

6 家にして

家にして 見れど飽かぬを 草枕 旅にも妻と あるがもしさ

(四・六三四)

この「家」は、夫婦二人の家である。

7 家に行く

家に行きて いかにか我がせむ 枕づく つま屋さぶしく 思ほゆ
べしも (五・七九五)

……ま玉なす 我が思ふ妹も 鏡なす 我が思ふ妹も ありと言は
ばこそ 国にも 家にも行かめ 誰が故か行かむ

古事記に検すに、曰く、件りの歌は木梨の軽太子の自ら

死にし時に作る所なりと。

(二三・三二六三)

家に行きて 何を語らむ あしひきの 山ほととぎす 一声も鳴け

(一九・四二〇三)

第一首は、「日本挽歌」(五・七九四)の反歌である。その内容から見れば、その「家」は夫婦二人の家であったことが明らかである。第二首での「家」は「国」と一緒に詠み込まれているため、男女がかつて一緒に居住していたところであったことが分かる。第三首は少し曖昧ではあるが、前の二首と同じように、夫婦二人の家と理解してもさしつかえないであろう。

8 家付く

我妹子を 行きてはや見む 淡路島 雲居に見えぬ 家付くらしも

(一五・三七二〇)

「い」とい妻を 帰ってすぐ見たい 淡路島は 遙かに見えて来た家が近くなったらしい」(『萬葉集』 日本古典全集 小学館)という意味なので、ここの「家」も夫婦一緒に住んでいるところだと分かる。

以上、様々な形をとる用例を見てきて分るのは、「家」という言葉が単独に使われた場合、次の可能性があるということである。

a 父母と同居しているところ。

b 妻と同居しているところ。

c 妻、子供と同居しているところ。

一見バラバラに見えるが、しかし、この三つの可能性には、一つ重要な共通点がある。つまり、「家」は「常住するところ」であるという点である。決して時々通ってゆくところなどではない。したがって「家

なる妹」は、「(二人一緒に住んでいる)家にいる妻」ということになる。それでは、いわゆる「通い」の場合にはどう表現したのか。この問題は、次で検討することにする。

四

「通い」の場合にどう表現したのかについての検討を進めるために、以下のいくつかの表現を通して、「家」という言葉の、歌の中の意味を考えてみることにする。

1 我妹子が家

紀朝臣豊河の歌一首

我妹子が 家の垣内の さ百合花 ゆりと言へるは 否と言ふに似る

(八・一五〇三)

泊瀬川 夕渡り来て 我妹子が 家の金門に 近付きにけり

(九・一七七五)

白たへの 袖はまゆひぬ 我妹子が 家のあたりを 止まず振りしに

(一一・二六〇九)

前二首にははっきりと男性が通って来る場面が描かれている。第三首は具体的にどんな状況なのか分からないが、旅に出た男の歌だろうと推測される。いずれにせよ、一緒にいないからこそ、「我妹子」の家の方に袖を振り続けるのだろう。

2 妹が家

天皇、鏡王女に賜ふ御歌一首

妹が家も 継ぎて見ましを 大和なる 大島の嶺に 家もあらましを (二・九二)

この歌は天智天皇の詠んだものであるが、この時二人は、別々に住んでいたことが分かる。

藤原朝臣八束の梅の歌二首

妹が家に 咲きたる梅の いつもいつも なりなむ時に 事は定め

む (三・三九八)

妹が家に 咲きたる花の 梅の花 実にしなりなば かもかくもせ

む (三・三九九)

この二首は、八束がまだ女と結ばれていないときに詠んだものである。

遠くありて 雲居に見ゆる 妹が家に 早く至らむ 歩め黒駒

(七・一二七二)

この歌は柿本朝臣人麻呂歌集の歌である。作者不明だが、歌の内容から見れば、女性の家に通う途中だと分かる。

大伴宿祢家持、娘子の門に到りて作る歌一首

妹が家の 門田を見むと うち出来し 心も著く 照る月夜かも

(八・一五九六)

この歌では、家持がこの時妻と一緒に住んでいなかったことが分かる。

上野 伊香保の嶺ろに 降る雪の 行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり (二四・三四三三)

ま遠くの 雲居に見ゆる 妹が家に いつか至らむ 歩め我が駒

右二首とも作者不明だが、やはり別々に住んでいると見ていいだろう。 (二四・三四四一)

3 君が家

「君が家」という表現は、女に限らず男同士でも使っている。しかし、男同士の場合、本論文の対象にはならないため、除外することにする。ちなみに、『万葉集』には「君が家」と表現されている歌が、合わせて一〇首ある。作者の性別で見ると、男の作が五首、女の作が四首、不明一首となる。作者不明の歌と男性の詠んだ歌を除いて、ここでは女性の歌だけを見ることにする。

天皇に献る歌二首 大伴坂上郎女、春日の里に在りて作る

外に居て 恋ひつつあらずは 君が家の 池に住むといふ 鴨にあらしを (四・七二六)

橘の歌一首 遊行女婦

君が家の 花橘は なりにけり 花なる時に あはましものを (八・一四九二)

右二首を詠んだ女は、ともに相手の男性とは結婚していないため、相手の家のことを「君が家」と表現できたものと思われる。これは現代人の我々でも「あなたの家」という時のことを考えると、容易に理解できる。しかし、次の二首が違っている。

柿本朝臣人麻呂の妻の歌一首

君が家に 我が住坂の 家道をも 我は忘れじ 命死なずは (四・五〇四)

大神女郎、大伴家持に贈る歌一首

ほととぎす 鳴きしすなはち 君が家に 行けと追ひしは 至りけむかも
(八・一五〇五)

第一首について『萬葉集全注』は「女のヨバヒは招婿婚の常識から見えて異例である：(中略)…もとは『妹が家に』とあったものが伝誦される間に『君が家』となり、作者も人麻呂から人麻呂妻と変わったと考える方が自然であろう」と述べている。本来「妹が家」であった可能性があるもので、⁽¹³⁾ここでは考察の対象から除外しておく方がよいであろう。

第二首の作者大神女郎は、家持の恋人の一人であると言われている。「行けと追ひしは」によって同居していないことが分かる。結ばれていたとは言え、別居状態にあった。そんな時に、相手の男の家を、自分の家とは思えるはずがない。だからこそ、「君が家」と表現できたものと思われる。

以上見てきたように、古代の女たちはたとえ結婚していても、別々に住んでいる限り、つまり、通いの場合、夫の家を自分の家とは認識しなかったと考えていいだろう。

五

以上の一から四をまとめてみると、次の「家」に対する認識」の表で示されているようになる。

古代の男性と女性は、まだ結婚していない段階では、それぞれ自分の

「家」に対する認識

婚姻状況	既 婚		未婚
	同居	別居	
男 性 にとって	・妻と共にいるところ ・妻と子供と共にいるところ ・父母、妻、子供と共にいるところ	生まれ育ったところ	生まれ育ったところ
女 性 にとって	・夫、子供と共にいるところ	生まれ育ったところ	生まれ育ったところ

生まれ育ったところを「家」だと認識していた。これは、現代ともまったく変わりが無い。ところが、対偶婚をバックにする多様な婚姻居住規制形態が併存する中では、「家」に対する考え方が、現在の我々の捉え方とは違っていた。つまり、新処居住と妻方居住（ともに同居）の場合、男性にとっては、父母（「父母」は妻方のであるか夫方のであるかは特定できない）、妻と子供のいるところが「家」であり、女性にとっては、夫と子供のいるところが「家」であったのである。しかし、通いの場合、常住する場所が別々であるため、それぞれ自分の生まれ育ったところを「家」と認識していた。たとえ子供が生まれたとしても、こういう認識は変わらなかったのである。

大ざっぱではあるが、『万葉集』の中の歌を通して、古代日本人の「家」に対する考え方を検討してきた。人間としては昔も今も共通する所のあることが否定できない一方、時代背景及び文化背景の違いによって、一見同じように見える物事や言葉でも、それに対する考え方の違いがある

ということも否定できないのである。本稿では、そのことを再確認できたと考えている。

注

- (1) 「イモ・セの用語から見た家族・婚姻制度」(品川滋子、『文学』二七―七、一九五九)。
- (2) 『万葉集 訳文編』(佐竹昭広他、塙書房・昭和四七・三・三〇)。
- (3) 『万葉集注釈』八卷二・二二六(澤瀉久孝、中央公論社・昭和三三・四・一八)。
- (4) 「家もあらなくに」(真鍋次郎『萬葉』第七四号・昭和四五・一〇)。
- (5) 「いへ・やど・やね」(吉井巖『萬葉』第一〇四号・昭和四五・七)。
- (6) 『上代日本文学と中国文学 中』(出典論を中心とする比較文学的考察)(小島憲之、塙書房・昭和三九・三・三〇) 九七七ページ。
- (7) 『万葉集私注 十』新訂版補卷(土屋文明、筑摩書房・昭和五二・一〇・二〇)。
- (8) 『大系 日本歴史』 古代国家の歩み(吉田孝、小学館・一九八八・二・二〇) 二四九ページ。
- (9) 注八同書、二五二ページ。
- (10) 『日本古代婚姻史の研究 上』(関口裕子、塙書房・一九九三・二・二八) 二八頁。
- (11) 古代日本の居住規制について、関口裕子氏は注十同書において次のように述べている。

八〜十一世紀中葉の婚姻居住規制は、そのすべての場合に通いを経る場合を伴いながら、特定条件下での夫方居住の現出を別にすれば、妻方居住↓新処居住が一般的で、初発からの新処居住がそれと併存した(略)と結論できよう。

つまり、古代には①通い、②妻方居住、③新処居住の三つの形態があったということである。
- (12) 『万葉集全注 巻第四』(木下正俊、有斐閣・昭和五八・一一・三〇) 五十

四ページ参照。同様のことが岩波日本古典文学大系『万葉集一』の補注(三六一ページ)にも述べられている。

(13) 注十二同書五〇四番歌の「考」(五五ページ)参照。なお同じことが、小学館日本古典文学全集『萬葉集一』(佐竹昭広他、昭和四六・一・二五)の頭注でも述べられている。

(原稿受理 一九九八年四月七日)